

描き直す勇氣



取得した資格：一級建築士
資格取得年度：令和6年度

さわ い たけのり
澤井 丈典*

受験の動機・経緯

建築について学び、建築技術職員として就職したからには、技術者として業務に従事したいと思い、いつかは一級建築士を取得したいという気持ちがありました。また、人生において勉強に時間を割きやすいタイミングを考えると、なるべく早いうちに勉強を始めた方が良くと考え、受験を決めました。とはいえ、新規職員の時期は、業務に慣れることに精一杯で試験勉強について考えている余裕もなく、就職後3年目によく試験勉強に時間を割くことができるようになりました。

結果的に、学科の試験を2回、製図の試験を2回受験し、計3年間の受験勉強を行いました。本稿では、建築士の受験をこれから考えている方を対象に、体験談をお伝えします。人により様々な道程があると思いますが、一例として参考になれば幸いです。

学科の試験における傾向と対策

学科の試験は、四肢択一式の5科目、計125問の試験です。合格するためには、各科目の得点と総得点の両方が合格基準点以上である必要があります。それぞれの基準点は、各科目がおおむね過半数、総得点はおおむね90点が目安と発表されています。一般的には、「法規」と「構造」の科目が、勉強の効果が現れやすく、得点源になると言われています。一方、「計画」については出題範囲が広いため勉強の効果が現れにくいと言われています。

試験を実施する公益財団法人建築技術教育普及センターのHPに「一級建築士を志す者に対して、習得すべき知識及び技能の目安を示すために掲載しています」という言葉とともに10年分の過去問が掲載されていたので、これを解けるようになれば合格できるだろうと考え、独学でマイペースに取り組むことにしました。紙と鉛筆を前にして机に座っていることがあまり得意ではなかったため、試行錯誤の結果、HPを利用し、過去問を何周もするという勉強方法にたどり着きました。この勉強方法では、選択肢を選ぶだけで解答できるため、場所と時間を選ばず、慣れてくると短い時間で1周できます。このほか、得点源である「法規」は時間管理を行うため、また、「構造」は計算が必要となるため、過去問を印刷して取り組みました。

過去問を解くに当たっては、出題形式が異なっても対応できるよう、写真や図解により、問題の内容を理解することを意識しました。「法規」については、試験時間内に全ての問題を解くことが難しい試験なので、過去問を解く際は時間を計ることが重要です。異なる出題形式に慣れたり、時間配分のイメージをつかむために、模試を受けることも効果的な対策であると思います。

合格した年の試験では、過去問では見たこともない選択肢も出題されましたが、合格基準点をわずかに超えることができました。

*長野県 木曾建設事務所 整備・建築課 技師

設計製図の試験における傾向と対策

学科の試験終了後、翌日には大手予備校の解答速報や合格基準点予測が公開されるため、自己採点によりおおむね合否がわかります。設計製図の試験までは、学科の試験から2ヶ月半しかなく、すぐに対策を始める必要がありますので、その年の設計製図の試験を受験するか否かの決断は、1ヶ月後の学科の合格発表を待たずにしなければなりません。金銭的な問題を考慮する必要があるので、設計製図の試験のために予備校に通うか否かについて、事前に検討しておくことをお勧めします。学科の試験に一度合格すると、3回まで製図の試験を受験することができます。私は、設計に関する業務経験もなく、独学で勉強して3回以内に合格する自信がなかったので予備校に通うことにしました。

設計製図の試験は、課題文の条件に沿って建築物を計画し、6時間半の中で、①1/200の手書きの図面（例年は平面と断面の計3～4面）と②1,000文字程度の文章と補足図により、計画の要点を解答するタフな試験です。試験は、課題文の読み取り、要求を満たす建築物を考えるエスキス、そして作図・計画の要点を記述する流れとなります。合格するためには、例年公開されている採点基準から、「設計条件・要求図面等に対する重大な不適合（未完成、上下階の不整合、要求室・施設等の未計画、法令への重大な不適合等）」を避けることが重要です。また、建築物の空間構成、建築計画、構造計画、設備計画について妥当な計画とする必要があります。ミスがない図面を提出することが望ましいのは言うまでもありませんが、限られた時間の中で膨大な量を作図する試験なので、問題文の読み取りやチェックの時間を十分に設ける等、重大なミスを避けるための戦術が重要となります。

私の場合、まずは制限時間内に図面を描き上げる能力を得ることが必要でした。提出図面を2時間半で描き上げることを目標として、苦手なパーツや図面があれば、そればかりを繰り返し描き続け、手が止まる時間なるべく少なくなるように練習をしました。その他、試験の2ヶ月半ほど前に、課題名

（令和6年度は「大学」）、留意事項及び注意事項が発表されますので、この情報を頼りに、用途に応じて要求される法令や寸法等について勉強を進めることができます。その他に、勉強を進める手がかりとして、今後も変わらないという確約はありませんが、解答用紙の大きさが一定のため、建築物の大きさに傾向があり、過去問の研究により防火・避難規定等についてパターン化する等の対策が可能です。

近年の傾向として、過去に出題されたことのない敷地条件が出題され、基本的な法規への理解度を問われることが多いように感じます。そのため、私は予備校での対策に加え、道路幅員、用途地域や高低差など、様々な状況が想定される条件を整理し、パターン化するなどの対策を行いました。予備校の費用は高額ですが、用途について研究された資料が配布される等、限られた時間の中で効果的な対策を行うことができるため、通うメリットはあったと感じています。また、合格者数の割合が例年ある程度一定であることから、相対的な評価がなされているように思われますので、他の受験者の図面と自身の図面を比較できる点もメリットでした。

これだけ準備をしていたのですが、合格した年の試験では、1mの寸法を調整する必要があるミスに作図後半で気づき、図面の一部を柱型から描き直す事態が発生しました。一瞬、諦めそうになりましたが、無我夢中で作図し、何とか合格できました。

おわりに

試験には合格しましたが、日々の業務の中で学ぶことは尽きず、試験勉強により身に付いた知識は一部分に過ぎないと感じています。建築技術職の業務は、多岐にわたるため、経験を積みながら建築のプロフェッショナルになれるよう、今後も日々精進したいと思います。

試験勉強の中で最も難しかったのは、モチベーションを保ちながら勉強する時間と環境を、継続して作ることでした。試験に際し、多大なご協力、ご配慮いただいた職場の皆さま、家族に、この誌面をお借りして深く感謝申し上げます。

【著者紹介】澤井 文典（さわい たけのり）

令和2年に長野県庁入庁（建築職）。令和5年度まで建設部都市・まちづくり課都市計画係にて都市計画法関連業務に、令和6年度から木曾建設事務所整備・建築課にて法令審査事務等に従事。